ISSN 2188-7330

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター

第5号
2016年1月発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

CONTENTS

分野を超えた研究連携により無限の可能性が生まれる
日本学術会議 言語・文学委員会幹事（国立国語研究所 副所長） 木部 暢子 ……❶〜❸
第一回日本語の歴史的典籍国際研究集会報告
夢の実現に向けた第一歩
京都産業大学日本文化研究所 所長 小林 一彦 ……❹
キックオフ・シンポジウムを振り返って
国文学研究資料館 研究主幹 小林 健二 ……❺
「紀州地域に存する古典籍およびその関連資料・文化資源の基礎的研究」経過報告
和歌山大学教育学部 准教授 大橋 直義 ……❻〜❼
オーロラと人間社会の過去・現在・未来
―古典籍・古文書が伝える江戸時代のオーロラ―
古典籍共同研究事業センター 特任准教授 岩橋 清美 ……❽〜❾
古典籍の若年層への普及活動
国文学研究資料館 研究主幹 田中 大士 ……❿
コラム 口福の羊羹『菓子話船橋』
古典籍共同研究事業センター 特任助教 井黒 佳穂子 ……⓫
トピックス ……⓬

分野を超えた研究連携により無限の可能性が生まれる

日本学術会議 言語・文学委員会幹事
（国立国語研究所 副所長）
木部（きべ） 暢子（のぶこ）

「いつも何度でも」

「千と千尋の神隠し」の主題歌ではないが、「いつも何度でも」そして「だれも何処ででも」日本語の古典籍が現物に近いかたちで見られる時代が到来しようとしている。日本語の歴史的典籍、約三〇万点を画像データ化し、それらと既存の書誌情報データベースを統合させてネットで公開する「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」は、それを実現する事業である。これに先行し、近年は古典作品を画像データで公開する図書館や文庫が増えている。参加大学約二〇、画像データベース約三〇万点という本事業は、「いつも何度でも」「だれも何処ででも」に「何でも」を加える事業であると期待される。

影印本からデジタル画像へ

私事で恐縮だが、私は卒業論文で平安時代末成立の古辞書『類聚名義抄（るいじゅみょうぎしょう）』の和訓に施された声点（文字の周囲に付されたアクセントを表す点）をもとに平安時代の複合語のアクセント規則を探るという研究に取り組んだ。そのとき使ったのは、当時、八木書店から刊行されていた天理図書館善本叢書の『類聚名義抄』（全三巻）である。もとは京都東寺の観智院に所蔵されていたため『観智院本 類聚名義抄』と呼ばれている。その後、天理大学図書館の所蔵となり、善本叢書として影印で刊行されたのである。白黒印刷で

分野を超えた研究連携により無限の可能性が生まれる

日本学術会議　言語・文学委員会幹事（国立国語研究所　教授・副所長）　木部 暢子

はあったが、実物を見ることが叶わぬ者にとっては大変、有難い刊行物であった。

卒業論文では影印本を最初の頁から順番にめくっていき、該当する単語とそこに付された声点をカードに書き写していくという作業を繰り返した。当時はパソコンもワープロもなかったので、単語と声点を書き写すのも、カードを整理するのも、すべて手作業である。正宗敦夫編『類聚名義抄 仮名索引 漢字索引』（風間書房）や望月郁子編『類聚名義抄四種声点付和訓集成』（笠間書院）といった索引類を使うこともあったが、声点の位置は自分の眼で確かめなければならず、影印本を左に置いての作業だった。もし当時、検索付きの画像データがネットで公開されていたら、机いっぱいに三冊の影印本を広げることなく、検索画面からパッと本文の該当箇所へ飛び、画面を拡大して声点の位置を確かめ、データ一覧表に情報を取り込むことができたのにと思う。

電子テキストの必要性

ネットの最大の魅力は、検索機能とリンク機能である。もちろん、これらの機能がなくても、画像データを公開する意味は大きい。画像データを最初から順に見て行き、用例を探し出す作業は、研究者にとっては必要な作業である。しかし、一般の人にとっては、知りたいことが素早く検索できる手段が必要であろう。そのためには本文の電子テキストの作成が不可欠である。電子テキストはまた、くずし字（草書体の文字）で書かれた画像データを理解するための手助けとしても必要だ。

ただし、ひとくちに電子テキストと言っても、これを作成するのは大変な作業である。まず、くずし字が読める人が少ない。三〇万点もの資料を読む人をどうやって確保するのか、これが最大の問題である。次に、テキストからどうやって検索システムを組むのかという問題がある。これについては、国立国語研究所が二〇一四年から日本語歴史コーパス「平安時代編」「室町時代編Ⅰ狂言」「江戸時代編（試作版）」（http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/）を順次、公開している。この技術がこの事業にも応用できるだろう。ただし、それも電子テキストがあってのことである。

タグとしてのテキスト

結局、電子テキストの必要性にどうしてもたどり着くわけである。じつは、電子テキストについては私も最近、頭を悩ませている。国語研の方言のプロジェクトでは、現在「方言コーパス」の作成作業を進めている。「方言コーパス」とは、全国の方言の自然談話を横断的に検索するシステムのことで、例えば、検索画面に「私」と入力すると、各地の談話資料から「私」相当の語を含む一文が共通語訳と方言（カタカナ表記）で

併記され、ボタンを押すと方言音声を聴くことができる。

このシステムでは、原資料の方言発話に行き着くために、共通語テキスト∨方言テキスト∨方言音声という段階を踏むようになっている。方言テキストと共通語テキストは、原資料を導き出すためのタグとしての機能を持っているわけだが、二つのテキストはそれだけでなく、利用者の理解を助けるためにも欠くことができない。

そこで悩んでいるのが、方言テキストと共通語テキストの作成を担当してくれる人の確保である。方言テキストは、一般に公開することを考えて、現在のところカタカナで表記している。それでもその方言が理解でき、ある程度の言語学の知識がある人でないとテキスト化の作業は難しい。また、このシステムでは共通語にタグの役割を担わせているので、共通語テキストは意訳ではなく、逐語的に方言に対応していなければならない。データの公開に関しては、方言コーパスも同じ問題を抱えているのである。

313-000-1	北海道	C	ウチラワ ソト ウチヤ	私たちは 外。 うちは	▶
8-002-1	弘前	C	ワエダケンタネスー〔笑〕	私のようだね〔笑〕	▶
25-000-1	秋田	B	オラnダテ アノー	私だって あの	▶
195-000-1	茨城	B	ワカンネーカ゛ アダシラ。	わからないが 私達は。	▶
176-000-1	群馬	B	ワタシガ ジューロクシチダネ。	私が 16、7〔歳〕だね。	▶
45-006-1	大阪	E	ワタシラヤッタラ	私らだったら	▶
178-001-1	北九州	B	ワタシガ オモ オモイダシテモ。	私が ×× 思い出しても。	▶
251-000-1	大分	C	アー ワタシャ スル。	ああ 私は する。	▶
246-000-1	鹿児島	C	アタヤ ミダド。	私は 見たよ。	▶
104-000-1	沖縄A	A	アー ソー ソー ワヌー	ああ そう そう 私	▶

「方言コーパス」検索結果画面の例

情報技術は日進月歩

この問題は、これまでの情報技術が「文字」を媒体として発展してきたことに起因している。しかし、情報技術は日進月歩である。音声に関していうと、ロボットやスマートフォンの世界では、すでに音声で質問して音声で応えるというソフトが実用化している。近い将来、電子テキストを経ずに、音声で検索条件を入力し、方言を含む何万時間もの音声データベースの中から条件にあった音声を検出することができるようになるかもしれない。古典籍データに関しても、電子テキストを経ることなく検索する技術の開発が進められているという（寺沢憲吾「文書画像の認識と理解」『ふみ』第四号）。分野を超えた研究連携により無限の可能性が生まれると信じている。

第一回日本語の歴史的典籍国際研究集会報告

平成二十七年七月三十一日(金)～八月一日(土)に第一回日本語の歴史的典籍国際研究集会「可能性としての日本古典籍」を国文学研究資料館で開催しました。

初日は、今西館長による開会の挨拶の後、立本人間文化研究機構長の挨拶、牛尾文部科学省研究振興局学術機関課長の来賓挨拶があり、有川九州大学名誉教授(当館顧問)による「古典籍共同研究とオープンサイエンス」の基調講演が行われました。その後、「古典籍研究の近未来」というテーマでパネル報告が行われました。

二日目は、ピーター・コーニツキー ケンブリッジ大学名誉教授による「国際共同研究の意義—古活字版の終焉に向けて」と題した講演の後、パネル報告が行われました。研究集会の印象記を館内・館外の先生から報告いただきます。

牛尾学術機関課長の来賓挨拶

夢の実現に向けた第一歩

京都産業大学日本文化研究所 所長 小林(こばやし) 一彦(かずひこ)

記念すべき第一回、日本語の歴史的典籍国際研究集会「可能性としての日本古典籍」にディスカッサントの一員として参加した。満足に責務をはたせなかったもどかしさはさておき、一人の聴衆としては、至福の二日間に今でも興奮が冷めやらない。

たとえば、文字認識の問題。人工知能が人間の書き癖を認識できるのか、読めるのか、と誰しも思うだろう。けれども「くずし字」の判読は、もはや八割を超える正確さだと聞く。さらに公立はこだて未来大学の寺沢先生の報告は、コロンブスの卵、目から鱗の衝撃だった。人工知能に、そもそも文字を読もうとさせないという発想。連綿する文字を墨のラインで認識して、コンピュータが同じような墨カーブ(文字列)を膨大な画像データの中から瞬時に探し出して来るという。同筆の写本なら(あるいは同じ書き癖の他筆も)、データさえあれば作品やジャンルを飛び越えて、夢の総索引が手に入ることになる。

願望が、はたまた夢想が、脳裏を駆けめぐる。陽明文庫には資料館の文献調査で毎年、参上している。ある年は、家凞(いえひろ)さん(※)好みの刷毛目渋引表紙で統一され、その頃に整えられた近衛家歴代の日記を拝見、調査させていただいた。またまた見えていた東大史料編纂所のある先生が私たちの調査に関心を示されて「きれいな写本ですね。原本では判読が困難な箇所もありますから、こうした複本の調査と撮影収集も大切な仕事なんですよね」と漏らされていたことを思い出す。研究者のさがで、国宝・重文がひしめく原本にどうしても目を奪われがちだが、江戸期の複本はよみやすく、複数の筆者(右筆)でも同じような美しい連綿を示すのが特徴。人工知能なら、こうした百科全書的な宝の山から、さまざまなヒントを瞬時に取り出してくれるのではないか。文学・歴史・有職故実はもとより、恩恵を蒙る人々の数は想像も及ばない。資料館では、こうした江戸期の複本類でも、開館以来、膨大な調査カードや写真データの蓄積がある。夢のようなプランが、夢でなくなっていく時代だからこそ、妄想だとアイディアの芽を自分で摘んでしまわずに、ひとり一人が夢を持ち寄ることが、思わぬ知的創造を生むのではないか、と夢想しているのだが。

※ 近衛家凞(寛文七年(一六六七年)六月～元文元年(一七三六年)十一月)。書道、絵画、茶道、自然科学等博学多才ぶりをうたわれた。

キックオフ・シンポジウムを振り返って

国文学研究資料館　研究主幹　小林（こばやし）　健二（けんじ）

去る七月三十一日（金）・八月一日（土）の二日間にわたって当館主催による日本語の歴史的典籍国際研究集会「可能性としての日本古典籍」が開催された。これは大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」で実施される共同研究で、今何が行われているのかを知ってもらうための催しである。多岐にわたる盛り沢山なプログラムの詳細はWEB（国文研HP「お知らせ・更新情報」2015.7.6付）から参照願いたい。

二日間を通して予想以上の聴衆が集まったが、その多くは「可能性としての日本古典籍」のタイトルにひかれて、国文学研究資料館が大型プロジェクトで何をしようとしているのかに興味を持っての参加に違いない。その意味で、一日目の「古典籍研究の近未来」は、古典籍のデジタル画像をいかに活用するかについて、自動翻刻や検索システムの構築などの具体的なイメージを示し、有川節夫氏（九州大学名誉教授）の基調講演「古典籍共同研究とオープンサイエンス」とも相まって、その可能性を実感できたパネルであった。三十万点のデジタル画像が「宝の山」となるかどうかは、これらの機能を高めていくことにかかっていよう。二日目は、ピーター・コーニツキー氏（ケンブリッジ大学名誉教授）の講演「国際共同研究の意義―古活字版の終焉に向けて」の他に三つのパネルが組まれたが、なかでも、「総合書物学への挑戦」において、三十万点の画像すべてに目を通し、レイアウトから大きく書物のカタチをとらえなおそうとする入口敦志氏（国文研 准教授）の報告が、新たなる研究方法を提示しており、可能性が感じられた。ともあれ、キックオフ・シンポジウムと銘打たれたように本プロジェクトはまだ始まったばかりである。今後、人文学研究に新たなる風をおこすことをめざして、共同研究事業を推進していきたい。

国際研究集会の様子

「紀州地域に存する古典籍およびその関連資料・文化資源の基礎的研究」経過報告

和歌山大学教育学部　准教授　大橋（おおはし）　直義（なおよし）

高野山・熊野三山を始めとした古刹を多く有する和歌山県内には、未だ学界に知られることのない古典籍・文化資源が多く残されていることは誰しもが想像するところである。しかしながら、「県」という枠組みの中ではもちろん、紀伊・大和・和泉・河内・伊勢・伊賀――つまり紀伊半島・「紀州地域」という圏域を見わたそうとするならば、その全貌を把握することはますます至難とせざるをえない。本計画は、そこに至る最初の一階梯（かいてい）として、国文学研究と他の研究領域――訓点語学・歴史学・仏教史学・美術史学・文化人類学・経済産業史学・人文地理学といった人文・社会科学系諸領域との情報共有を旨とした「領域横断的地域研究」を立ち上げ、それを「紀州地域学」として促進・啓蒙することを目標としている。また、その過程において調査を行う「紀州地域」に所在・関連した古典籍類および有形無形の文化資源についての仮目録を整備・公開し、これらについての全貌を把握するための基礎的段階とする、その端緒を拓きたい。

第一回研究集会の風景

さて、右のような目論見のもとに進めている本計画であるが、現段階（二〇一五年一一月初旬）における状況を摘記しておこう。

まず研究例会は昨秋からこれまでに計八回、都内・大阪市内・和歌山市内において開催した。その報告題目は以下の通りで、文学・史学はもちろん、国語教育学や会計史学にまで及んでいる。

吉村旭輝「粉河祭からみる中世郷村と近世門前町」／杉山和也「南方熊楠にかかわる黄檗版一切経について」／大橋直義「西国巡礼研究への一視点―紀州研新収資料『西国巡礼道中笑草』の紹介をかねて」／貫井裕恵「失われた「東寺碑文」をめぐって」／高橋悠介「日前国懸と内侍所」／大東敬明「『紀伊続風土記』と正月行事の神名帳」／柏原康人「『神道集』『蟻通明神事』、同「玉津嶋明神事」における叙述の性質」／吉田唯「高野山大学図書館・金剛三昧院寄託本にみる近世期の高野山と神道について」／中山一麿「中四国地域から見た紀州―モノの出所を求めて」／菊川恵三「「百人一首カルタ」を用いた大学と地域の交流―自主開発「セレクト20」の活用」／三光寺由実子「「中世寺院会計史の一齣―東寺光明真言講方算用状と高野山谷上院勘録状」。

加えて、本年三月と八月には二度の研究集会を和歌山大学とその周辺において開催した。第一回研究集会においては、坂本亮太

「高野山金剛三昧院と舎利の相承」／海津一朗「明恵遺跡興行と中世民衆仏教の成立」／大河内智之「喜海の歓喜寺創建と移動する仏像」の報告が行われ、殊に後半二本と関わり、県立博物館館蔵（寄託）品および施無畏寺聖教の閲覧調査、有田川下流域に点在する「明恵遺跡」の巡検を行った。文献学的調査研究と人文（歴史）地理学的知見との融合という観点からも意義深い試みであった。

第二回研究集会においては、以下のような講演・シンポジウム等を行った。

大橋直義「紀州地域学共同研究の現在と今後」／【講演】此松昌彦「熊野地域の地質・地形による景観と地域文化史との関わり」／【シンポ：紀州地域の道と景観・儀礼・芸能】中本真人「院政期の熊野御幸と儀礼・芸能」／舩田淳一「熊野から伊勢へ―西行と修験・神道説をめぐって」／本橋裕美「旅路の歌―花山院の熊野行幸歌を中心に」／吉村旭輝「熊野の獅子舞と扇踊り―扇からみた伊勢信仰のひろがり」／【ラウンドテーブル・延慶本『平家物語』巻十全注釈―高野・粉河・熊野】／【シンポ：延慶本『平家物語』と紀州地域・修験】佐伯真一「延慶本『平家物語』と紀州地域」／源健一郎「『平家物語』諸本と修験―延慶本の相対的位置づけ」／川崎剛志「承久の乱後の熊野三山検校と熊野御幸」／鈴木正崇「紀州と修験」。

今はこれらに具体的に言及することはできないが、熊野について、あるいは巡検を行った友ヶ島（虎島は葛城修験の行場）とその周辺海域について、修験・祭礼・地理・考古といった人文科学的知見と地質学的知見とを融合させることによって、自然科学分野（地質学）と人文科学分野が協同的に行える地域研究のあり方が模索できたという点、本研究計画以後という観点からも極めて有意義であった。また、延慶本『平家物語』という観点では、八月一日に開催された第一回日本語の歴史的典籍国際研究集会でのパネルディスカッション「紀州地域と寺院資料・聖教―延慶本『平家物語』の周縁」…座長・大橋直義／宇都宮啓吾「智積院聖教における「東山」関係資料について―智積院蔵『醍醐祖師聞書』を手懸かりとして」／中山一麿「増叶年譜雑考―安住院・覚城院蔵書調査を通して」／牧野和夫「根来寺と延慶本『平家物語』の周辺資料」と連続してもいる。

これらの成果報告は、やはり本計画の一部でもある道成寺文書の悉皆（しっかい）（全数調査のこと）調査の第一次報告もあわせ、来年度中には誌上にて行えるよう調整中である。また、未だ本格的に稼働しているとは言いがたいが、HP（「紀州地域学」で検索）の面貌（めんぼう）（顔立ちのこと）もおおよそ調ったので、そこで研究会・展覧会・巡検企画等の告知、報告を行っていこうと思う。様々な機会にぜひご参加いただきたい。

和歌山県立博物館館蔵品調査

オーロラと人間社会の過去・現在・未来
―古典籍・古文書が伝える江戸時代のオーロラ―

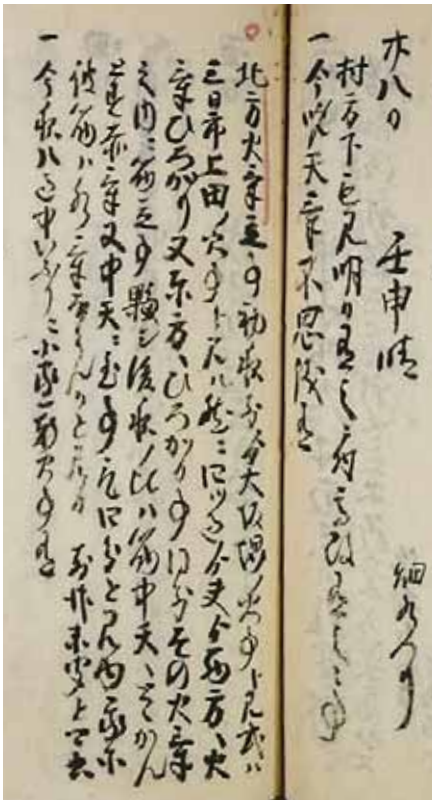
古典籍共同研究事業センター　特任准教授　岩橋（いわはし）　清美（きよみ）

江戸時代の文人、大田南畝の随筆『半日閑話』のなかに、明和七年七月二八日（一七七〇年九月一七日）に、北方の空に「赤気（せっき）」があらわれたという記述があります。「赤気」とはどのような天体現象をさすのでしょうか。実は、低緯度オーロラのことで、古くは『日本書紀』にも記されているのです。通常、オーロラはアラスカ・カナダ・南極など、高緯度地域で見られるのですが、「磁気嵐」と呼ばれる大きな地磁気擾乱が生じると低緯度地域でもオーロラがあらわれます。低緯度オーロラが発生すると、北方の空が火事と間違うほど真っ赤になるため、前近代の人々は「赤気」と呼んでいました。

現在、国文研では国立極地研究所との共同研究「オーロラと人間社会の過去・現在・未来」（研究代表者　国立極地研究所准教授片岡龍峰）において、古典籍・古文書のなかからオーロラや太陽黒点の記録を抽出し、過去のオーロラの発生率や発生状況について研究を進めています。本研究では、中国の宋代・清代の古文献の調査も行っており、日本の記録と照合することで、より正確なオーロラ出現年月日の特定をめざしています。

オーロラは、太陽の活動が活発化すると出現率が高まり、人工衛星の運行等に影響を及ぼすことがあります。このため、過去のオーロラ記録から太陽の周期を明らかにすることは、とても重要なのです。

国文研では、この調査の過程で、新たに二点の明和七年七月二八日の「赤気」の記録を発見しました。明和七年のオーロラの記録は、すでに約三〇点ほどが見つかっていますが、随筆類が多く、「赤気」を直接、目にした人の記録は、それほど多くはありませんでした。



庚寅日記（慈尊院中橋家文書、国文研所蔵）
7月28日の「赤気」の様子が記された部分

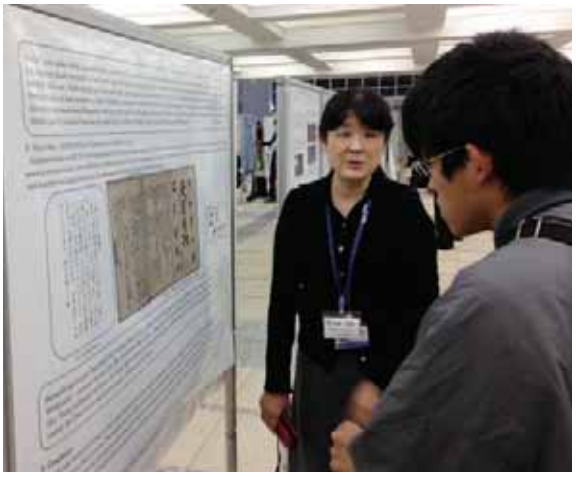
今回、発見したものはいずれも日記で、オーロラを目撃して驚き慌てる人々の様子や時刻の経過とともに変化する夜空の姿が克明に記されています。一つは、紀伊国伊都郡慈尊院村（現和歌山県伊都郡九度山町）中橋家に伝来した庚寅日記（国文学研究資料館所蔵）で、もう一つは山城国紀伊郡稲荷村（現京都府京都市伏見区）伏見稲荷社の社家であった東羽倉家（ひがしはくらけ）の家記（東丸神社所蔵）です。これらの日記を通して、明和七年七月二八日の夜空の変化を再現してみましょう。

この日、オーロラは、午後七時頃、北方の空に出現し、夜一〇時をまわる頃には、空の半分ほどを占め、銀河を覆うように広がっていきました。そのうち白気（白あるいは緑色のオーロラ）が現れ、翌日の午前二時頃までオーロラの光は明るくなったり暗くなったりしていたようです。日記には、オーロラの赤い光の中に星が透けて見えた、あるいは、白気が銀河を貫くという表現があり、幻想的な夜空の状況がうかがえます。

このような、詳細な記録を発見し蓄積することで、前近代におけるオーロラの出現日時や状況を特定することが可能になります。また、オーロラは地球規模の現象であるため、多地点同時観測の記録の積み重ねによって、日時特定の精度を高めることができ、さらには明和七年のオーロラを地球規模で再現できると思われます。

江戸時代におけるオーロラの出現は、明和七年のほかに、享保一四年（一七二九）・安政六年（一八五九）などが候補としてあげられます。今後は、寺社の記録や大名家の国元日記などを中心に調査を行い、オーロラの観測記録を蓄積していく予定です。

また、古典籍や古文書からは、当時の人々がオーロラをどのように考えていたかを知ることもできます。明和七年は大旱魃（だいかんばつ）だったため、人々は旱魃の影響で空が赤くなったと考えたようです。多くの人々が「恐ろしきこと」と感じた一方で、建部綾足の紀行文『折々草』には「豊作」の兆しと喜ぶ老人のことが書かれています。このような人々の意識のあり方も興味深いところです。



シンポジウム参加者に、
1770 年のオーロラについて説明する筆者

※ここで紹介した明和七年のオーロラについては、平成27年11月16日、国立極地研究所で開催された第六回極域シンポジウムにおいて「SEKKI－phenomena on September 17,1770」として報告しました。

古典籍の若年層への普及活動

国文学研究資料館　研究主幹　田中　大士（たなか　ひろし）

当館は、平成二六年度から文部科学省に認められた大規模学術フロンティア促進事業の一つとして「日本語の歴史的典籍の国際研究ネットワーク構築計画」を推進しています。この計画の活動は多岐にわたっていますが、その大きな柱の一つに、若年層への古典籍の普及活動があります。この大型プロジェクトは、従来の日本文学、日本史などの分野にとどまらない多分野の歴史的典籍を対象に、全世界に画像データベースを公開し、それに基づく研究を行うというものです。このプロジェクト自体も十年の息が長い計画ですが、目指すところは、そのさらに未来に日本語の歴史的典籍が世界に普及し、人類共有の財産になることです。その計画を推進するためには、お膝元の我が国から古典籍研究の多くの人材が育つ必要があります。

現在、公教育においては、学習指導要領で小学校低学年から古典に親しもうというプログラムが行われています。低年齢の時期から我が国の古典に親しもうとする試みは画期的なものと思われます。われわれのプロジェクトでは、この学習指導要領の志を支援すべく、まずは小学生への古典の普及に力を入れています。

本年八月から十一月まで、文部科学省の情報ひろばにおいて、当プロジェクトの展示を行っていましたが、そこでは、当館所蔵の画像を用い、人気アニメ「ＮＡＲＵＴＯ―ナルト―」が、江戸時代の小説『児雷也豪傑譚（じらいやごうけつものがたり）』が源流になっていることをやさしく解説し、現代のアニメにも古典の物語が脈々と流れていることを、子供たちにも知ってもらうように努めました。さらに、この展示に伴うイベントとして、十一月五日（木）に、文科省情報ひろばのラウンジにおいて、八王子市立みなみ野君田小学校の六年生の皆さんに、当館の山下則子教授が「ＮＡＲＵＴＯ―ナルト―」と『児雷也豪傑譚』との関係について特別授業を行いました。受講された皆さんは、ナルトにも登場する、蝦蟇（がまがえる）、大蛇、ナメクジが江戸時代の物語に色鮮やかに描かれていることに目を丸くしていました。情報ひろばでの特別授業はさらにもう一回、十二月十一日（金）にも新宿区立愛日小学校の六年生の皆さんを招いて行いました。当館は、これらのイベントをきっかけとして、小学生向けの古典の普及活動をさらに発展させてゆきたいと思います。

文部科学省での特別授業の様子

コラム 口福の羊羹『菓子話船橋』

古典籍共同研究事業センター
特任助教
井黒 佳穂子

夏目漱石が『草枕』で「どう見ても一個の美術品だ」と賞した羊羹は、日本を代表する和菓子の一つですが、元は中国の料理名で、羊肉が入った羹（スープ）を指しました。羊羹が日本に渡ってきたのは十四世紀前後で、中国に留学した禅僧から点心として伝わったといいます。当時は肉食が禁じられていたため、代わりに葛粉、小麦粉、小豆などを混ぜて、蒸し上げた料理だったようです。

今日のように、寒天を入れて練り上げる羊羹が登場するのは、江戸時代に入ってからで、寛政年間（一七八九-一八〇一）に、江戸本町の紅谷志津磨、または日本橋の喜太郎が、従来の蒸羊羹に代わって練羊羹を売り出すと、たちまち評判となって多くの店で作られるようになりました。とりわけ、御用菓子屋の鈴木越後、金沢丹後、船橋屋織江などが有名でしたが、この船橋屋織江の二代目・群次郎が記した菓子製法書が『菓子話船橋』です。

深川佐賀町にあった船橋屋織江は、尾張藩の御用達を受けた高級菓子屋でした。船橋屋の練羊羹は一日に八百棹、千棹も売れたといわれ、浮世絵や番付にも名前が見えます。

船橋屋の創業については諸説ありますが、本書に拠れば、文化の初めに初代・郡次郎が大坂から江戸へ移って開業したようです。また、浅草雷門にも同名の店があったことから、しばしば混同されてきましたが、親戚ながら別系統の店であることが、近年の研究で分かっています（今村規子「二つの「船橋屋織江」」『和菓子研究』虎屋文庫、二〇一五年三月）。残念なことに、明治頃には廃業したようで、現在は残っていません。

江戸時代に板行された菓子製法書の中でも、『菓子話船橋』は菓子製法書の白眉といわれ、砂糖の煮詰め方、小豆の煮方、餡の練り方など菓子作りに欠かせないものから、薯蕷饅頭（山芋等を饅頭の皮に用いた蒸し菓子）、かすてら、練り羊羹、求肥飴まで、約八十種類の菓子の製法が具体的な分量と共に載っています。船橋屋織江の看板商品であった練羊羹の製法を紹介しましょう。

○練羊羹
○白大角豆 四百目　○唐三盆砂糖 九百目　○角寒天 二本半

是も前にしるす如く、分量次第にて唐三盆を煮詰て、大角豆の漉粉を追々入て練なり。尤、角天は其以前より水六合入て煮崩し置、練あがりたる時、水嚢にて餡の中へ漉込て満遍なく練まぜ、船へ厚紙にて文庫を拵て、其中へ流すなり。

（唐三盆（3.4kg）を煮詰め、大角豆（1.5kg）を軟らかく煮て漉したものを、少しずつ入れて練りあげる。寒天は先に水六合（1ℓ）で煮溶かしておく。練りあげた餡の中に、溶かした寒天を漉し入れて満遍なく練り混ぜ、厚紙で作った型に流し込む。）

『菓子話船橋』は玄人の菓子職人ではなく、菓子好きの素人に向けて書かれたもので、大正時代の婦人文庫にも収録され、家庭向けの教養書としても長く読み継がれてきました。たまには熱いお茶を淹れて、羊羹との甘い一時を楽しんでみてはいかがでしょうか。

『菓子話船橋』より
当館蔵　請求番号49-65

シンポジウム開催（当館主催・共催）

◆国際シンポジウム「読みたい！日本の古典籍」
―歴史的典籍の画像データベース構築とくずし字教育の現状と展望―

[日時]平成二十八（二〇一六）年二月十七日（水）十一時〇〇分～十七時三〇分
[会場]大阪大学豊中キャンパス内、大阪大学会館アセンブリー・ホール
（豊中市待兼山町一―十三）
[主催]大阪大学文学研究科、国文学研究資料館、科研挑戦的萌芽研究「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発（研究代表者　飯倉洋一）」

Googleアカウントをお持ちの方は次のURLから「くずし字教育プロジェクト」にアクセスできます。
https://plus.google.com/104467959388424694 55/about

オープンデータ化

■「国文研古典籍データセット」の公開

国文学研究資料館では、古典籍をもっと自由に研究・活用いただくため、国立情報学研究所のご協力のもと、当館所蔵の日本の古典籍三百五十点の全冊画像データ（画像約六万三千コマ）とその書誌データを、同研究所の「情報学研究データリポジトリ（IDR）」より、データセットとして、平成二十七（二〇一五）年十一月十日（火）から一般公開しております。
http://www.nii.ac.jp/dsc/idr/nijl/nijl.html

主な公開作品は、源氏物語や二十一代集などの日本文学作品をはじめ、和食に関するもの（豆腐百珍など）や世界文化遺産になった和紙に関する書（紙漉重宝記）、医学関連（医心方）など、いろんな分野の古典籍になります。

これらのデータ利用の可能性を考え、活かしていくために、人文系・理系を問わず様々な方からアイデアを提案してもらった「歴史的典籍オープンデータワークショップ」を平成二十七（二〇一五）年十二月十八日（金）にメルパルク京都（京都市）で開催しました。

ワークショップの様子

当館所蔵の「絵本 松の調」がご覧になれます。
携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。

ふみ 第6号は、平成28（2016）年6月発行予定です。

表題の背景色は黄丹（おうに）です。「おうたん」とも読みます。クチナシとベニバナを重ね染めした橙色に近い色です。奈良時代の衣服に関する定めである「衣服令」により、皇太子の礼服の色とされ、当時は一般庶民の使用が禁止されていました。この色は昇る朝日の色とされています。

本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の「方丈記」（本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本）を利用しています。

表題「ふみ」の書体は、石川島造船所（現IHI）創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」（活版印刷見本帳）を利用しています。

ふみ
「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター
第5号
〈発行日〉
平成二十八（二〇一六）年一月十五日
〈編集・発行〉
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター
〒190-0014
東京都立川市緑町十一三
TEL 050-5533-2988
FAX 042-526-8883
https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/